

「目の見えない白鳥さんとアートを見に行く」 川内有緒 著 集英社インターナショナル 2021年9月発行

個人的に好奇心がくすぐられて手に取った本です。書名から、「どういうことだろう？」と率直に思ったのがきっかけです。

学生の皆さんもそんな風に図書館にある本を手に取ってもらってもいいのかなと思います。書名が気になった、装丁が気になった、著者を知っている、友達が読んでいたなど、どんな理由でも良い「きっかけ」になるとと思います。

さて、本書ですが、どういう話が展開して行くのかと非常にわくわくしながら読みました。読んでみると、ただ見えないひととの付き合い方や向き合い方が書かれた本というわけではないことが分かります。

著者の川内有緒さんは、友人たちと一緒に目が見えない白鳥さんと美術館へ行き、1つ1つの作品を鑑賞しながら、それがどんな作品なのかを説明していきます。すると、著者と友人たちとで一つの絵画を見たときの見え方、捉え方が違うのです。

そもそも、目で見たものを言葉で伝えるためには、伝えるための想像力と見たものを言語化していくことが必要です。「こんな風に見える」「私にはこう見える」などと意見を交わしながら伝えていくのです。そして、見えているひとはちゃんと見ているようで見えない、よくよく見ると違ったなどということが起きてきます。その思いがけないやり取りが非常に興味深く描かれています。

美術鑑賞を通して様々なテーマの話が展開していきますが、書かれているのは終始一貫として「対話」と行った先での「人との出会い」です。そしてそれは、例えば見えない人に対する歩み寄りではなく、お互いを知り、それによる発見を楽しむというものです。本書は、「見たものを正しく」伝えることが主眼なのではなく、「対話」と「人との出会い」を通して「豊か」になっていく過程が描かれています。

皆さんにもぜひこの「豊か」になっていく感覚を味わって欲しいと思います。